

教育論文 アクティブ・ラーニングを通して学ぶ小学校「家庭」における児童への理解

著者	広瀬 歩美
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.26
号	No.2
ページ	15-18
URL	http://doi.org/10.15052/00002952

教育論文

アクティブ・ラーニングを通して学ぶ
小学校「家庭」における児童への理解

広瀬 歩美

1. 小学校「家庭」と児童の現状

平成20年1月の中央教育審議会の答申では、家庭科に関して「実践的・体験的な学習活動を通して、家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業等についての基礎的な理解と技術を養うとともに、それらを活用して課題を解決するために工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を一層重視する」（冒頭抜粋）というように、約1500字の中で7回「実践的」という言葉を使用している¹⁾。また、現在の学習指導要領¹⁾では、家庭科の教科目標を「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」とし、具体的には「A家庭生活と家族」「B日常の食事と調理の基礎」「C快適な衣服と住まい」「D身近な消費生活と環境」の4内容で構成している（表1）。家庭科は、児童が現在・未来を生きる力を身に着けるために重要となる知識と技術を学ぶため、授業での取り組みは「実践的」である必要がある。しかし近年、児童の6人に1人は相対的貧困であるとも報告されている²⁾ように、児童を取り巻く家庭生活は多様化しており、生活に対する知識や経験の違いは大きい。また、児童が必ずしも「家庭」を有しているとは限らない。例えば現在、社会的養護の対象となる児童は約4万6千人おり、児童養護施設には約2万8千人の児童が生活している³⁾。児童養護施設で生活する児童のうち、約4割が小学校在籍年齢である6~11歳の児童である。よって、家庭科の教科目標として挙げられている項目を児童全体で達成することためには、児童一人ひとりに対する配慮が欠かせない。

2. 小学校「家庭」の意義

家庭科で取り扱う題材は、「望ましい答え」はあったとしても、「正解」はないものばかりである。よって、家庭科は基本的には児童にとっては取り組みやすい教科であり、学生に家庭科の思い出を尋ねてみても、好意的な意見が大半を占める。その上で、教師は、児童一人ひとりの家庭環境、個性や嗜好を尊重しながら、子どもたちが、今すぐではなくとも将来的に「望ましい答え」に向かっていけるよう「生きる力」の基礎を作らなくてはならない。それは、現在の家庭生活の営みに困難を抱える児童に対しても同様、もしくはより大切であると言える。なぜなら、これらの児童が将来自立し新たに家庭生活を営む際に、目安となるような体験が家庭科で積み上げられていたならば、それは生きていく上での力となるからである。そのためには、教師が、児童一人ひとりに対しに細やかな配慮が出来るかということが非常に重要になると言える。

3. 本学小学校教職課程「家庭」の位置づけ

前述したように、児童を取り巻く背景はさまざまであるが、家庭科の学習指導要領に挙げられている内容は、教科の性質上児童の家庭生活に深く踏み込むものがほとんどである。よって、小学校教員は、授業を進める上での言葉の選び方を始めとした細やかな配慮ができなくてはならない。本学では、小学校教職課程「家庭」は、児童学科の主に1年生を対象とし、秋学期に開講されている。小学校教職課程は、「教職に関する科目」に先立ち「教科に関する科目」の履修をするカリキュラムとなっている。「家庭」は「教科に関する科目」であるため、受講生にとっては、中学校もしくは高校生の時に、生徒として受けた家庭科以来の家庭科の学修となる。「家庭」の授業を履修する際には、

自身が小学生であった頃の記憶を呼び起こしながら追体験しつつも、「教師の視点」を意識する初めての経験を行う。また、受講生は、全員が前学期に「児童学概論」を履修している。児童学概論では、子どもを対象として見つめる視座を理解することをねらいとしており、子どもを取り巻くさまざまな環境や、保育者の関わり方について学んでいる。小学校教員を目指しての学び始めである「教科に関する科目」の前に、児童理解に重きを置いた科目を設定できることは児童学科に小学校教職課程がある強みでもあり、「子ども」へのまなざしを学んだあとの学生だからこそ、次項で紹介する家庭科教育における必要な配慮について、気が付きやすい/理解しやすい土壌が出来上がっていると言える。

4. 小学校教職課程「家庭」におけるアクティブ・ラーニングの実践

子どもたちが「実践的な態度」を身に付けられるような授業展開には、アクティブ・ラーニングが不可欠であり、そのような授業展開の方法を学ぶためには小学校教職課程「家庭」においてもアクティブ・ラーニングは不可欠である。「子ども達の生きる力を育てるために、自分はどうかあるべきか」ということを常に意識するよう初回の授業時に全体で共有し、学習指導要領内容のA～Dを実践するとともに、座学の際にも受講生が自分で考え、意見を言う場を多く設けている。それにより家庭科に必要な知識・技能を再確認するとともに、配慮が必要な場面を学生が体験することで、実感を持って学べるよう努めている。特に、何気ない言葉選びが配慮に欠けてしまいがちな場面が家庭科には存在する。以下に例を記す。なお、本文中に記載されている学生の発言等については、個人が特定されないよう筆者が再構成したものである。

(事例1) 子どもたちの背景に対する配慮
場面：

「家庭生活における仕事」を書き出す。それぞれについて、「男性にはできないもの」「女性にはできないもの」「子どもにはできないもの」があるか、また「実際にやっている人はだれか」「家事分担としてできる仕事はなにか」書き出し、意見を共有する。

学生と教員とのやりとり：

教員：「なぜ、“父親”、“母親”ではなく、“男性”、“女性”で考えるのでしょうか。」

*学生が、子どもたちの家族形態がさまざまであることに気がつく。また、妊娠・出産以外の家庭生活の仕事上の性差がないことにも気がつく。

教員：「家庭生活には、どのような仕事がありますか？」

学生：「掃除があります。」

教員：「掃除と言っても様々な場所の掃除がありますね。」

学生：「お風呂掃除、トイレ掃除、掃除機かけ、自分の部屋の掃除……」

教員：「色々と挙がりましたね。さて、では現在、日本の子どもたちの貧困率はどの程度の割合でしょうか。子どもたちが皆“自分の部屋”を持っているとは限りません。」

*学生から、配慮が必要な点についての発言が出てきたタイミングに合わせて、子どもの貧困に関する新聞記事を紹介する。

(事例2) 批判的な発言が出がちな場面での配慮

場面：食品表示の授業の中で、学生がいちご味のお菓子の原材料にいちごが使われていないことに気づく。そこで、香料と着色料を紹介し、見た目と匂いの再現を行う。

学生と教員とのやりとり：

教員：「このように、実際にはフルーツを使わずとも、着色料と香料で似せることが可能です。」

学生(複数)：「知らなかった、怖い、嫌だ」

教員：「さあ、ここでも教師になるみなさんは、発言を考えなくてはなりません。子どもたちの保護

者の中には、食品会社や食品添加物を製造する会社に勤めている方がいます。教師が安易に批判を誘導するような話し方をしてはいけません。今回の例では、それぞれの食品添加物がどのような目的で使われているのか、安全性の基準はどのように決められているのかなどをきちんと教師が把握したうえで、主観を交えず客観的事実を伝えることが大切です。』

このように、家庭科で取り扱う題材の多くは、児童やその家族のプライバシーに踏み込まざるを得ないことが多い。事例として挙げたような事柄は、ともすると児童の心を傷つけることになるということを十分に認識したうえで教科指導を行う必要がある。アクティブ・ラーニングにてそのような場面を体験的に学習することで、学生自身が教師になった際に実践しやすい。

5. おわりに

小学校教職課程「家庭」の授業におけるアクティブ・ラーニングの活用は、学習指導要領を見ても必要不可欠である。学習指導要領に沿ったさまざまな内容について主体的な実践をとおして学ぶことで、児童の背景や必要な配慮について気が付き、理解を深めていくことが可能となる。そのような気付きを得た教師が教育現場に出ることで、さまざまな家庭背景を有する児童みなが家庭科を好きになり、将来に向けた「生きる力」の基礎を養えるよう願っている。

謝辞

本稿にて「家庭」の授業の様子を紹介することをご快諾くださった本学非常勤講師の馬場由子先生に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省. 小学校学習指導要領解説家庭編. 平成20年8月.
- 2) 内閣府. 平成27年版 子ども・若者白書
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/b1_03_03.html (平成28年9月27日閲覧)
- 3) 厚生労働省. 社会的養護の現状について www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo_genjou_01.pdf (平成28年9月27日閲覧)

(ひろせ・あゆみ 聖学院大学人間福祉学部児童学科助教)

表 1. 小学校家庭科学習指導要領内容項目

-
- A 家庭生活と家族
 - (1) 自分の成長と家族
 - ア 成長の自覚、家庭生活と家族の大切さ
 - (2) 家庭生活と仕事
 - ア 家庭の仕事と分担
 - イ 生活時間の工夫
 - (3) 家族や近隣の人々とのかかわり
 - ア 家族との触れ合いや団らん
 - イ 近隣の人々とのかかわり
 - B 日常の食事と調理の基礎
 - (1) 食事の役割
 - ア 食事の役割と日常の食事の大切さ
 - イ 楽しく食事をするための工夫
 - (2) 栄養を考えた食事
 - ア 体に必要な栄養素の種類と働き
 - イ 食品の栄養的な特徴と組み合わせ
 - ウ 1食分の献立
 - (3) 調理の基礎
 - ア 調理への関心と調理計画
 - イ 材料の洗い方、切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付け
 - ウ ゆでたり、いためたりする調理
 - エ 米飯及びみそ汁の調理
 - オ 用具や食品の安全で衛生的な取扱い、こんろの安全な取扱い
 - C 快適な衣服と住まい
 - (1) 衣服の着用と手入れ
 - ア 衣服の働きと快適な着方の工夫
 - イ 日常着の手入れとボタン付け及び洗濯
 - (2) 快適な住まい方
 - ア 住まいへの関心、整理・整頓及び清掃の仕方と工夫
 - イ 季節の変化に合わせた生活の大切さ、快適な住まい方の工夫
 - (3) 生活に役立つものの製作
 - ア 形などの工夫と製作計画
 - イ 手縫いやミシン縫いによる製作・活用
 - ウ 用具の安全な取扱い
 - D 身近な消費生活と環境
 - (1) 物や金銭の使い方と買い物
 - ア 物や金銭の大切さ、計画的な使い方
 - イ 身近な物の選び方、買い方
 - (2) 環境に配慮した生活の工夫
 - ア 身近な環境とのかかわり、物の使い方の工夫
-